地域振興は連携しながら切磋琢磨

出雲市　窪田地区

１．取り組みの概要

八岐大蛇（ヤマタノオロチ）退治で有名な須佐之男命（スサノオノミコト）を主祭神とする「須佐神社」がある出雲市佐田町。佐田の地名は、須佐之男命が「大須佐田」、「小須佐田」と名付けたことに由来しているそうです。町内の窪田地区は、小学校入学児童が１０人を切り、葬儀は毎週のようにあるといった、目に見える形で少子高齢化が進行している厳しい状況の中でも、様々な組織が連携しながら切磋琢磨し、地域の活性化に取り組まれています。

そのうちの一つが、町内の７地区の振興協議会と２農業法人等が結成した「窪田ふるさと会」。農地・水・環境保全向上対策事業を活用しながら、耕作放棄地を復田して泥田バレーを実施されたり、農産品の加工・品評をされるなど地域全体で何とか頑張っていこうと取り組まれています。

この度、県の支援を受けて１２ａの耕作放棄地を復旧され、地域振興のために小豆を作付けされました。この取り組みを、窪田ふるさと会の役員を務め、地域を支えている集落営農組織「橋波アグリサンシャイン」の構成員でもある三島さんと出雲市農林政策課にお聞きしました。

不耕作地での泥田バレー

２．耕作放棄地の復旧

鳥獣被害と耕作放棄の悪循環

―今回復旧された耕作放棄地について、どのようなことで困っていましたか。

三島さん　川沿いにある道路と川との間にあった細長い形状の耕作放棄地を復旧しました。この耕作放棄地に限らず、地域ではイノシシの侵入にとても悩んでいます。特に最近、イノシシの被害は増加傾向にあります。流石に田の真ん中での被害はありませんが、ちょっと休耕している田や畑のへりなどは、ことごとく掘り起こされてすごいことになっています。

出雲市　ただでさえ農作業がたくさんあるのに、その上鳥獣被害対策の負担が増えるのは大変なことで、このような農地は耕作するのをやめてしまおうと―

三島さん　そういう気持ちになりますよ。気持ちが失せるというか、やる気が削がれますよね。イノシシが侵入すると一晩で駄目になりますから。

耕作放棄地と周辺の様子
奥に橋が見えるように右手の川と左手の急坂に挟まれた細長い形状の耕作放棄地

出雲市　イノシシは強烈ですよね。あの、掘り起こしの害は。

三島さん　耕作放棄地があるから、そこを伝わってイノシシが侵入するということはあります。川があっても全く苦にせず、あっという間に渡ります。田んぼが荒れて、病気や病害虫が発生するということも多少はありますが、影響は小さいと僕は思います。まあ、木でも生えて日照が悪くなれば、大きな問題になりますが。

出雲市　特に山間部は、人目につかない田畑がたくさんあって、それが山際にあると、鳥獣被害は相当大きいですよ。

三島さん　結局、耕作放棄するところは地域の真ん中ではなく、へりなど手をかけられないところからです。それはイノシシにとっては好都合でー

出雲市　山際の荒れたところが増えれば増えるほど隠れ家になり、イノシシが侵入しやすくなる。そうすると、いよいよもって管理できない農地が増えるという悪循環になる。

　これには個人では対処できないので、団体・組織として地域を守っていこうという気持ちがこの地域では強く、中山間地域等直接支払制度や農地・水・環境保全向上対策事業に熱心に取り組まれています。

復旧後の耕作放棄地

３．地域振興の活動

窪田ふるさと会－農地の保全・地域振興の活動母体－

―お話しいただいたように窪田ふるさと会では地域の鳥獣被害が大変な中でも耕作放棄地を復旧され、地域振興に役立てようと取り組まれました。地域振興を含めた様々な取り組みを広域的な組織により実施されていますが、その背景はどのようなものでしょうか。

三島さん　平成１９年度から始まった農地・水・環境保全向上対策事業に、どのような活動組織で取り組むか、話し合いをしたところ、出来るだけ大きい組織で取り組もうということになって、地区全体で「窪田ふるさと会」を結成したのです。会は、７地区の振興協議会と２農業法人、窪田コミュニティセンター、窪田小学校、ＪＡいずも佐田営農センターが加入しています。

　窪田ふるさと会の農地・水・環境保全向上対策の取り組みは、島根県農地・水・環境保全協議会が発行されている「“農地・水・環境保全”水土里のネットワーク通信」第１２号に掲載されています。

　http://www.shimanedoren.or.jp/arkadia/kai_set.htm

出雲市　組織が大きければ、各単位組織が得意な活動をしたら、結果として組織全体で事業の要件を満たすことが可能になる利点があります。また、事業を実施する上で、誰が事務担当者になるかが大きな課題となっていますが、複数の組織をまとめて組織数を少なくすることで、事務担当者も減らすことが可能となります。その少人数の方は大変なのですが、組織全体として負担は軽減されますからね。

　このような組織の立ち上げでは、地区の皆さん、まとまりが良いというか、協力を惜しまないように思えます。仕事柄、様々な地区に行きますが、この窪田地区、物凄く綺麗なんですよ。制度が求めている以上に、農地をきっちりと管理されている。

―同感です。道路沿いしか見ていませんが、ここまで草を短く刈り込まれていて驚きました。

出雲市　これは、取り組みに対する姿勢というものが、よくよく参加者の方に周知され、行き届いており、

皆、実行されているということだと感じましたね。出雲市の中で、この窪田地区は制度の浸透力が違います。
三島さん　そうおっしゃっていただくとありがたいのですが、これからだんだん高齢化してね、これまでのような活動が難しくなるかもしれません。

小豆アイスクリームー復旧した耕作放棄地に小豆を作付けて加工・販売ー

―復旧後の耕作放棄地には小豆を作付けされました。どのように地域振興につなげられましたか。
三島さん　小豆は割と土地が痩せたところでも栽培しやすく、復旧したばかりの耕作放棄地でも適しているだろうと作付けました。地区では昔、水田の畦に小豆を植えていたこともあり、小豆の栽培はとっつきやすかったです。また、丁度、ＪＡさんが小豆栽培を推進されており種子も残っていました。収穫した小豆は、餅やおこわなど様々な加工ができるし、各家庭でも食べられるしお祭りにも使えるというのも小豆を栽培した理由です。

―小豆をどのように加工して、地域振興につなげましたか。
三島さん　本当は小豆をアイスクリームの中に練りこみたかったのですが、コーンに小豆を入れて、その上にアイスを乗せてみました。アイスクリーム機はリースです。アイスクリームのパックをセットして、レバーを引くとアイスクリームになって出てくるものです。
　この、小豆アイスを１１月３日の地域の祭りで販売してみたら、長蛇の列が出来るほどの盛況でした。
出雲市　美味そうですよね。小豆アイスというのは。
三島さん　小豆アイスクリームは、皆が集まって、とりあえず何か簡単に出来るものはないだろうかと話し合って生まれたものです。写真を撮ろうと考えていましたが、忙しすぎて当日の写真も、小豆アイスの写真も撮れず終いでした。

地域振興のための様々な取り組み

―アイスと言えば、地区ではヤギの乳を使ったアイスも売っているそうですね。
三島さん　そうです。ヤギだけではなく、地域の特産品として人気があるヤーコンを使ったソフトクリームもあります。ゆかり館で販売しています。
　出雲須佐温泉ゆかり館　http://www.yukarikan.com/index.html

　他にも様々な特産品開発に取り組んでいます。１１月３日のお祭りでは、乾燥野菜やこんにゃくの燻製なども販売しましたが、皆さん喜んで食べてくれました。

―こんにゃくの燻製は始めて聞きました。昔からあった食べ物、ではないですよね。
三島さん　そうですね。これはこんにゃく組合で考えたものです。ジャーキーみたいで美味しかったですよ。

―乾燥野菜も地域の農家の方が考えたものですか。
三島さん　それもね、地域の女性方が何かしたいと考え出したものです。野菜を、どこでも手軽に料理に使えるように出来ないかと取り組まれました。かぼちゃなどをスライスして、ゆでて、乾燥させて、真空パックに詰め、販売に向けて頑張っておられますが、課題があるようです。どうも、乾燥させたものが、うまく戻らないようです。

―地区では、昔から地域振興の取り組みが相当盛んなようですね。
出雲市　羊を活用した除草もされていますね。
三島さん　羊さんは、近くの農業生産法人で飼育しています。最近、またブームになってきましたね。今、

羊の毛糸で編み物をして、セーターやマフラーや靴下を作っています。
　ただね、かなり昔から色々なことをやっていますが、なかなか成就しませんね。
　地域振興だけでなく、地域間交流にも取り組んでいましたが、今はちょっと下火になっています。過去には集落外の消費者の方に田植えに来てもらったり、稲刈りなどの交流もしていました。また、平成８年から約１０年、島根大学の学生さんに泊まってもらい、稲刈りや田植えなどもしてもらっていましたが、今は中断しています。

―どのような事情があって中断されたのでしょうか。
三島さん　長い間取り組んできて、少しインターバルを置きましょうと中断したのですが、受け入れ体制を維持するのが、なかなか大変なんですよ。私も、受け入れる側でしたが、地区外に働きに出るようになり、受け入れが難しくなりました。

―地区で、農業に限らず、これはと思える成功はどのようなものがありますか。
三島さん　うーん…。意外とそれがないんですよ。例えば、こんにゃく組合さんがこんにゃくを作っていますが、この取り組みは何十年も続けていて、ようやく「橋波こんにゃく」は結構知られた特産品になりました。「窪田町やすらぎ会」さんのポン菓子も何年も頑張って来られて定着してきたものです。ここに至るまでには地道な取り組みが重要だと思うんです。多岐でブランド化したイチジクも、そうだったのではないかと思いますよ。
　この、窪田地区の中でも、いろいろやってはみていますが、長い間続けてモノになるのは、そうそうないように思えます。

―それでも諦めず、様々な取り組みをされる原動力は何でしょうか。
三島さん　それはやっぱり、何とかしないといけない、したいという気持ちです。取り組むからには、何とか、うまくやっていこうという気持ちは、皆さん強く持っていると思いますよ。
　今のところ飛び抜けてヒットした特産品がないということで、皆、秘めた競争心を持って、何とか自分がーと、お互い切磋琢磨していると思いますよ。あそこがこんにゃくなら、うちはこれで、と。

―そのようなものがたくさんありますよね。様々なアイスクリーム、こんにゃく、ポン菓子、ウコン、草木染め、山羊などなど、独特のものから伝統があるものまで。
三島さん　やっぱりね、同じものをするのではなく、自分たちは違うものをしようという地域性と、皆の活動の方向性というものがあると思いますよ。

―皆さんの気持ちというか、地域性に根差している活発な取り組みを、他の地域で参考にするというのは非常に難しいとは思いますが、アドバイスをいただけないでしょうか。
三島さん　地域振興についてのアドバイスは難しいのですが、地域をどうするかということでは、法人化、組織化が一つのポイントだと思います。今は個人では限界があるので農業法人、営農組織でやっていき、機械もほ場も出来るだけ大型化して作業効率をあげていく。法人化、組織化では各農家が所有している小型機械の扱いなど、取り組むには様々な壁が立ちはだかりますが、そうせざるを得ないと思います。行政もそのように後押しされています。そういう組織ができないところは、耕作放棄地が増えていくと思います。ただ、組織を作っても条件が悪いほ場は組織の経営を圧迫します。とは言っても地域の農地を放棄したくないので、法人もボランティア的なところも持ちながら、地域を維持していく。
　平成５年に任意の組織を立ち上げ、平成１０年に法人化しましたが、僕等がやっているのはこのような地域維持型の法人です。なかなか経営拡大、改善するのは難しいですよ。